（別紙様式４－１）　　（県立高等学校・中学校用）

（熊本県立大津高等）学校　令和元年度（２０１９年度）学校評価表

１ 学校教育目標

教育基本法の目的及び理念、並びに熊本県教育大綱に基づき、２１世紀の我が国と地域社会を担う有為な人材の育成を目指す。この目標達成のために本年度の学校経営目標を以下のように定め、体・徳・知の調和のとれた生徒の育成に努める。

校是【盡己竢成】

（「文武一体」基礎基本の力、「凡事徹底」やり抜く力、「恕のこころ」思いやりの心）

２ 本年度の重点目標

３・５・７ｐｒｏｇｒａｍ（３つの理念と５つの視点と７つの実践）

（１）３つの視点【１００周年を迎えた時の学校像】

ア　グローバルに活躍する大津高校ブランド卒業生輩出

イ　質の高い教育に裏付けられた城東地区進学校

ウ　革新の力溢れる体力・知力・人間力の統合

（２）５つの視点【大高が目指す「グローバルスタンダード」（いつどんな場所でも臆することなく）】

ア　自分の立ち位置を知る

イ　自己を鍛える

ウ　自ら考え価値観を表現する

エ　世界と繋がる

オ　未来の課題に取り組む

（３）７つの実践

ア　海外修学旅行

・生徒個々が将来、自己のグローバル化に繋がる道筋を示すプログラムの企画立案

（・海外大学研修　・コース別研修　・日台歴史学習）

イ　チャレンジ大会・体育大会・ダンス発表会

・一日一日の計画的鍛錬とその成功体験

・可能性を信じ続ける大切さの実感

（・チャレンジ完走 100%　・集団演技）

ウ　生徒会・ボランティア・社会貢献

・自主的・主体的をキーワードに、新企画を実現できるサポート

（・文化祭新企画　・地域連携活動　・生徒会選挙）

エ　理数科・体育コース・美術コース

・専門学習で得られた成果を発表する機会の充実

・専門領域に焦点化した高大連携

（・社会貢献活動　・成果発表の場の拡充）

オ　部活動振興

・自らの成長を感じ取れる日々の練習

・顧問と生徒の信頼関係を通じた人間力の育成

（・サッカー部全国制覇　・全国大会出場）

カ　授業改善・課外授業・個別添削指導

・教材研究に裏打ちされた授業改善

・進路目標のコンセンサスに立った個別指導の充実

（・進路シラバス作成　・進路面談指導）

キ　心の教育・防災教育

・「恕」相手を思いやる教育プログラム

・震災経験を風化させない教育の確立

（・恕のこころウィーク　・ストレス対処スキル学習）

３　自己評価総括表

評価項目 大項目	評価項目 小項目	評価の観点	具体的目標	具体的方策	評価	成果と課題
学校経営	学校力の向上	職員の連帯感の確立	本校の教育活動に対して教職員が共通理解を図り、８割の教職員が、連帯感が確立していると回答する。	･運営委員会を中核として各部、各委員会の連携充実を図る。 ･日々の連絡をClassiで行い、職朝を主に学年会の時間として拡充・充実する。	A	･各部間の連携を深めるために、運営委員会の充実を図った。各行事への早期計画と検討及び反省を行い、行事内容の精査にもつながった。（教職員：連帯感が確立と回答９割） ･Classiの活用により、連絡体制がｽﾑｰｽﾞになった。また、昨年と同様、職朝実施を週２回とし、毎朝の学年会の時間が充実し共通理解が深まった。
		生徒の夢実現のための取組	部活動の振興を図り、生徒が生き生きとした学校生活を過ごすことで、９割の生徒が「入学して良かった」と回答する。	･部活動の支援体制の整備を図り、全校応援等を通じて本校における生徒の「大高魂」を高める。	B	･生徒の達成感を高め、お互いに共有する行事（部活動、体育大会、文化祭、ﾁｬﾚﾝｼﾞ大会等）を充実させた。（生徒：入学して良かったと回答７割）
	外部への情報発信	ホームページの充実と学校便りの発行	本校の取組や生徒の頑張りをホームページで随時紹介し、７割の保護者が「ホームページが充実している」と回答する。また、学校便りの発行等を通して、近隣の中学校等へ本校の取組を周知する。	･各科、コース、部活動等の結果をＰＲし、情報を随時更新する。 ･学校便り（美コース便り等）を学期毎に作成し、近隣の中学校等へ掲示を依頼する。	A	･生徒の学校での活動をﾎｰﾑﾍﾟｰｼﾞやPTA新聞で伝えることができた。（保護者：ﾎｰﾑﾍﾟｰｼﾞが充実と回答８割） ･各科・ｺｰｽの情報を学校便り（科・ｺｰｽ便り）として作成した。今後は近隣の学校への周知等を行うことで、生徒募集にも繋げていきたい。
学力向上	基礎学力の向上	分かる授業の展開	基礎基本の定着と向上を図る授業を展開し、８割の生徒が「授業は丁寧で分かりやすい」と回答する。	･各テストを授業へ反映させ、基礎基本の徹底を図る。 ･外部での研修や校内外の公開授業等へ積極的に参加し、授業力向上に努める。	B	･1･2年生の数学、英語では習熟度別展開授業を行い、基礎基本の徹底に重点を置き、応用力の育成も図った。（生徒：特色を生かした授業や行事の実施と回答８割）
		学習習慣の確立	自主的・自発的な学習の支援を充実し、生徒の学習習慣が定着する。（１・２年は２時間、３年は３時間）	･面談等を行い、個に応じた家庭学習について指導する。 ･スタディサプリやClassiの活用を図る。 ･家庭学習時間の調査を行い、定期考査や模擬試験結果との相関関係を調べる。	B	･担任を中心に日常的な個別面談や個別学習指導を日々行うことができた。（生徒：個別の質問に熱心に指導と回答８割） ･家庭での学習習慣を身に付けさせる指導を行い、学力向上につなげていきたい。

３　自己評価総括表

評価項目 大項目	評価項目 小項目	評価の観点	具体的目標	具体的方策	評価	成果と課題
学力向上	授業の充実	研究授業等の実施	研究授業の実施や外部公開授業や研究会への参加等で授業の改善を図り、８割の生徒が「授業は丁寧で分かりやすい、授業は自分の興味・関心を高めてくれる」と回答する。	･学期に１回研究授業と公開授業週間等を実施する。 ･全職員が学期１回以上授業を参観する。 ･スーパーティチャー配置校における公開授業等への参加を促す。	B	・ｽｰﾊﾟｰﾃｨｰﾁｬｰを招いての研究授業等を実施するなど、授業研究を実施できた。公開授業案内を近隣の小中高校や生徒保護者に案内をしているが、今年度は参観が少なかった。実施方法等を検討していきたい。 ・令和４年度学習指導要領改訂にむけての授業研究を図る。
キャリア教育（進路指導）	進路指導の充実	自己実現への意欲の喚起	生徒・保護者に対する進路情報の提供、大学等との連携等を通し、進路意識の高揚を図り、８割の生徒が「進路志望先を定め、その達成のための努力をしている」と回答する。	･「進路の手引」を充実し、新大学入試制度に対応できるものとして刷新し、一年次から面談や家庭訪問等でその活用を図り、進路意識の高揚に努める。 ･大学や専門学校等と連携し進路ガイダンス、進路講演会等を充実する。 ･新大学入試制度への対策として、新テストに向けた授業改善や1･2年生の朝の課外授業を早期に開始する。	A	・本年度は２種類の「進路の手引き」（現行と新大学入試制度に対応できるもの）を作成し、進路資料として、面談等で有効に活用することができた。 ・進路講演会等を各学年毎に実施し、その後の進路指導に役立てることができた。大学の出前授業は、その後の生徒の進路意識の高揚を図ることができた。 （生徒：進路指導が充実していると回答８割）
		個別指導の充実	個に応じた指導体制の充実を図ることで、生徒一人一人の進路意欲が高まり、８割の生徒が「進路実現に向けての個別指導が充実している」と回答する。	･面談等を通して生徒の進路について意識を高めるとともに、個々の生徒の目標について情報の共有を行う。 ･学年を中心に生徒に応じた目標の設定と個別指導の計画、教科と連携した指導体制を確立する。 ･スタディサプリやClassiの活用を図る。	A	・一斉授業と並行させながら、応用力を高める個別指導を充実させることで、各学年の対外模擬試験等で成果をあげることができた。 （生徒：個別質問に熱心に指導と回答８割） ・ｽﾀﾃﾞｨｻﾌﾟﾘ通信を作成したり、Classiのﾎﾟｰﾄﾌｫﾘｵを活用し、家庭での学習を促した。生徒任せではなく、効果的な活用方法について検討したい。

３ 自己評価総括表

評価項目		評価の観点	具体的目標	具体的方策	評価	成果と課題
大項目	小項目					
生徒指導	健全な心身の育成	基本的な生活習慣の確立	あいさつや掃除、言葉遣い、身だしなみの整備、交通ルール・マナー等、凡事徹底の積極的な実践によって、７割の生徒が「ルールを守っている」と回答する。携帯電話、スマートフォン等の適切な使用方法の定着を図り、８割の生徒が「ルールを守っている」と回答する。	・日常的な声かけを実践し、生徒の情報の共有化と学年との連携強化を図る。 ・ＨＲ、集会を通した指導の徹底を図る。 ・定期的に街頭指導と交通安全教育を実施する ・生徒会、PTAと連携し、ルール「午後10時以降の使用禁止」を徹底する。	B	・毎日の登校指導での声掛けとあいさつ指導を実施した。 ・服装指導を年４回実施することで、大高生としての身だしなみの指導を、各HRや集会等で継続的に実施した。 ・職員間の共通理解を図る研修を実施し、年間を通して統一した指導ができた。生徒の規範意識の向上にもつながった。（生徒:ﾙｰﾙを守っていると回答９割） ・ｽﾏｰﾄﾌｫﾝ利用に関する専門家を招いての講話を実施し、集会等でも適切な利用を呼びかけた。いじめにつながる利用は減少してきているが、校内での無断使用が後を絶たない。また、約５割の生徒が家庭や学校のﾙｰﾙを守っていない現状がある。 ・家庭と連携しながら今後も指導を続けていきたい。
		生徒会活動、ボランティア活動の充実	自主的な行事等の運営と校外のボランティア活動への参加を促し、８割の生徒が「積極的に参加している」と回答する。	・生徒参加型の企画運営を行い、各種ボランティア活動の紹介と参加を促す。	A	・体育大会は雨天のため短縮開催となったが、生徒会役員の真摯な取り組みの結果、成功裏に終わった。文化祭においても、生徒会を中心とした各ｸﾗｽ生徒の主体的な取組が活発であった。 ・各種ﾎﾞﾗﾝﾃｨｱ活動の紹介を随時行うことで、積極的な参加が見られた。（生徒:積極的に参加していると回答４割）
		健康教育、環境教育の充実	保健委員会活動の充実や積極的な美化活動への取組、学習環境の改善に向けての意識の喚起を図り、８割の生徒と教職員が「校内美化やエコ活動に取り組んでいる」と回答する。	・保健、美化委員会を中心とした掃除の方法等の紹介や環境教育の充実に努める。	A	・学習環境整備ﾌﾟﾗﾝ（SSK-P点検）の評価項目や各ｸﾗｽとの事前事後の連携等を確実に実施し、学習環境への意識向上へと繋げた。 ・美化委員会と保健委員会を中心として、掃除方法等の紹介や環境教育の充実に努めた。（ｴｺ活動に取り組んでいると回答、生徒：８割、教職員：７割）

３ 自己評価総括表

評価項目 大項目	評価項目 小項目	評価の観点	具体的目標	具体的方策	評価	成果と課題
人権教育の推進	人権尊重の意識の向上	人権教育の充実	自他の命を大切にする心の育成と、人権問題を意識した教育活動について、８割の教職員が「積極的に実践している」と回答する。	･人権教育の視点を踏まえた授業の実践を行うとともに人権教育ＬＨＲを中心にした人権問題啓発に係る取組の充実を図る。	A	・人権教育LHR等は日程を変更して計画どおり実施できた。各学年で生徒の実態に応じた教材を取り扱うことで充実したものとなった。今後も教材を工夫しながら、生徒の人権意識の高揚に努めたい。
		職員研修の充実	個別の教育支援計画、個別の指導計画を完備し､配慮を要する生徒を支援するための情報を共有する。	･人権教育推進委員会（管理職を含む）を毎週実施し、内容の充実を図る。 ･情報の共有化並びに教職員の意識を高めるため学期に１回職員研修を実施する。	A	・継続して個別の支援計画等を作成し、授業担当者や外部機関の観察から得られた情報を基に支援内容について随時検討を行った。 ・生徒理解研修を、毎学期実施し、情報を共有することで事後の指導に生かした。
	命を大切にする心の育成	プログラムの改善と実践	自他の命を大切にする心の育成を意図する教育活動を教職員全員で実践する。	･教職員全員が、自らの教育活動の機会を捉えて、自他の命を大切にすることについて学期に１回生徒に語る場面を設ける。	A	・８月末から９月に「恕の心ｳｨｰｸ『心のきずなを深める月間』」を実施し、命の大切さを学ぶ教室や思いやりｳｨｰｸなどを通して､教職員の意識の向上､生徒の心の教育を図った。
いじめの防止等	いじめをしない、させない、許さない姿勢の確立	いじめの未然防止	自己肯定感を高め、他者理解を深める教育活動を実践することで、９割の生徒が「学校は楽しい」と回答する。	･学期に１回、いじめの防止等に関する職員研修を実施する。 ･体験活動、ボランティア活動を通し、自己有用感を涵養する。 ･学年毎に生徒の実態を踏まえて、自己肯定感や他者理解を高めるストレス対処教育に係るＬＨＲを実施する。 ･ＳＮＳ等が適切に使用できるよう情報モラルを高める取組をＬＨＲや全校集会等の機会を捉えて実施する。	B	･いじめの認知については、対策委員会を学期に１回開催し、SCにも専門的見地から助言を頂いた。また、職員間の連携や共通理解を高めるために、学年会等を利用して生徒理解を深めた。 ・学年ごとに実態に即したｽﾄﾚｽ対処教育を実施した。 ･全校集会や学年集会、LHRやSHRでSNSの適正使用を促した。 ･全校生徒にいじめ通報ｱﾌﾟﾘの登録を行い、ﾈｯﾄ上でのいじめの早期発見と早期解消を目指した。
		いじめの早期発見	いじめの早期発見につなげるため、「心のアンケート」を実施し、積極的ないじめの認知に努めるとともに認知したいじめ事案の早期解消を図る。	･各学期に１回「心のアンケート」を実施し、その結果については速やかに事案の検証と認知に努める。 ･担任による個別面談をこまめに実施する。 ･いじめに係る相談窓口について生徒や保護者に周知する。	B	・ｱﾝｹｰﾄを学期に１回実施し、いじめの早期発見に取り組み、いじめと認知した事案については、担任･学年･生徒指導部･保健部と連携し、早期解決に努めた。 ・担任や学年主任との面談を随時行い、必要な場合はSCとの面談も実施した。 ・いじめに係わる相談窓口を入学式やPTA総会等で保護者にも周知した。

３　自己評価総括表

評価項目		評価の観点	具体的目標	具体的方策	評価	成果と課題
大項目	小項目					
地域連携（ｺﾐｭﾆﾃｨ･ｽｸｰﾙなど）	学校施設の防災・避難所機能の構築	ＰＤＣＡサイクルの実践と地域の理解	昨年度、大津町と結んだ災害時に学校施設を一時避難所とする協定を充実させ、学校防災計画をより良いものとするために防災型コミュニティ・スクールの枠組みを利用して議論を深め、地域と連携した避難所運営計画を立てる。	･避難所として学校を利用する視点から、校内の施設・設備の確認を行う。 ･避難所開設訓練とともに、避難所における高校生ボランティア設置訓練を実施する。	Ｂ	・昨年度締結した大津町と学校施設の避難所等に関する基本協定を運用するにあたり、具体的な活用方法等について協議を行った。 ・昨年度実施した「学校安全総合支援事業」での取組を生かし、地域と連携した防災型ｺﾐｭﾆﾃｨ･ｽｸｰﾙの拡充を図った。
	防災教育の推進	生徒の防災対応能力の向上	カリキュラム･マネジメントの視点を踏まえた安全教育の充実を図る。生徒自身が状況を判断し、最善を尽くそうとする「主体的に行動する態度」を身につける。自助だけでなく、共助の姿勢を持ち、安全な社会づくりに参画し、社会貢献に対する公助の意識や社会への帰属意識を醸成する。	･防災教育や避難訓練、防災新聞や防災マップの作成、防災講話を通して、生徒の防災意識の更なる高揚を図る。 ･防災主任を中心に防災教育の充実を図り、地域と連携した防災避難訓練等、体験的学習を取り入れる。	Ｂ	・防災主任による定期的な防災新聞を発行し、生徒のみならず職員にも自然災害ﾒｶﾆｽﾞﾑや、災害時の注意点などを説明することで、自然災害に対する意識改革等を図った。 ･保健部と連携しながら避難訓練を実施し、訓練の意義を説くなど、適時に指導を行うことで、災害時の自分の役割を意識させることができた。

４　学校関係者評価
学校評議員会及び学校関係者評価委員会の主な意見等 ○保護者の「大津高校に入学させて良かった」という満足度の高さに驚いた。 ○職員アンケートで「本校で意欲的に仕事ができる」に対して「あまり当てはまらない」と回答した職員が１３％いることに対して、今後の課題ではないかと思う。 ○「携帯電話・スマートフォンの適正利用」については、小中学校においても課題となっている。幼保・小中高の連携の一環としては、高校生をリーダーとした児童・生徒会役員による取組を今後できないか検討してほしい。 ○「生徒」「保護者」「職員」で同内容の質問項目があり、多少ではあるが差異が見られる。この原因となるものを改善していくことで、より開かれた学校生活が送れるのではないかと感じる。相互のコミュニケーション、普段からの交流をもっと大切にしてほしい。 ○目標設定に「回答の８割」等の標記があるものが多く、その割合で評価されているのではないかと疑問が残ったものもある。内容をどの程度重視されているのかと考えた項目が少し見受けられたが、概ね問題ないと思われる。 ○生徒と保護者のアンケート結果について、「やや当てはまる」までの割合が高いことが、結果として出ていることが良い事と思う。大津の校風が見えている。 ○学校の教育目標に対して、生徒の今やこれからを考えられた重点目標が立てられていると思う。 ○ボランティア活動の参加に、近隣の小中学校の放課後学習ボランティアへの参加をお願いしたい。 ○保護者からの学校に対しての評価は、高評価で素晴らしいと思う。 ○心配のある生徒に対しての連携がもう少し密になるように、入学時にできる方法の検討をお願いしたい。 ○特別支援が必要であるが、先生方の負担が増えているとのことで、サポート体制を考えなければならないと思う。 ○受検生の定員割れが残念なところ。利便性は他校に比べて良いので、近隣中学校への学校紹介では学習面でも素晴らしい体制をもつ学校であることをアピールしてほしい。 ○公共交通機関等でのマナーや、駐輪場でのマナーなどについて、今後とも御指導をお願いしたいと思う。 ○スマートフォン管理については、基本的には学校と本人・家庭とが協力して取り組むべきこと。学校と本人・家庭との共通理解をどのようにつくっていくのか、中学校でも課題意識を持っている。また、学校の方針や取組を本人や保護者に広く知ってもらうための機会や方法について、中学校においても検討したいと考えている。 ○大津高校と大津町の中学校で、連携して教育の充実に取り組むことができればと考えている。 ○体育大会や入学式、卒業式などを通して、大津高校の素晴らしい教育を知ることができるが、生徒や保護者にその素晴らしさが伝わっていない面もあると思う。中学生や保護者が、大津高校の教育に触れる場や機会を、更に増やしていただけるとありがたい。 ○あいさつやマナーは大変すばらしいと感じる。大津高校に行くと多くの生徒が気持ち良いあいさつを実践してくれる。勉強への取組も、先生方が個人に合わせて取り組まれており、大変良いと思う。 ○地域とのつながりをもっと増やせないかと感じる。地元のイベントへ部活動生徒が参加したり、地元中学校との交流会など、さらに地元や地域に愛される学校になって欲しいと思う。

５ 総合評価

本年度の重点目標の７項目については、学校評価アンケートの結果及び学校評議員会・学校関係者評価委員会の意見等を踏まえると、おおむね達成できている。

（１） 海外修学旅行

予定では海外大学研修としていたが、高校との交流会に変更した。本年度交流した高校からは次年度に本校へ来校し、今後も交流を続けて欲しいと要請があっており、自己のグローバル化に繋げる取組ができた。

（２）チャレンジ大会・体育大会・ダンス発表会

各行事は生徒が成長する機会となり、大変充実した大会となった。チャレンジ大会は完走１００％の目標達成とはいかなかったが、全員が長距離コース（42.195km）に挑戦するなど、積極性が高まった。

（３）生徒会・ボランティア・社会貢献

数多くのボランティアへの自主的な参加が見られた。生徒会選挙においても選挙管理委員会が企画し滞りなく実施できた。地域との連携活動にも率先した取組を促したい。

（４）理数科・体育コース・美術コース

専門授業と特色ある実習を通し、専門性を意識した学びの場を追究した。また、理数科での課題研究発表では３年連続熊本県代表となり、美術コースでも各種コンテスト等での活躍など大きな成果をあげた。

（５）部活動振興

人間力の育成を主軸にして、各顧問は活動のあり方を考え実践した。また、今年は令和２年度の部活動活動方針をまとめた。各部ではサッカー部の高校総体（県大会、九州大会）優勝、新人戦（県大会、九州大会）優勝などや、少林寺拳法部、放送部、美術部において全国大会、全国コンクールで輝かしい活躍を見せた。

（６）授業改善・課外授業・個別添削指導

日々の個別添削指導を強化し、進路指導に繋げる取組を行うなど、生徒一人ひとりに応じた指導の充実を図ることができた。活発な研究授業及び公開授業への参観者増加が課題であり、新学習指導要領に向けた授業改善についてもさらに研究する必要がある。

（７）心の教育・防災教育

恕の心ウィークを設け、命の大切さ、他者を思いやることを再認識させる貴重な機会となった。
防災主任による防災新聞の発行を通して、自助・共助の考えを深めることができた。

６ 次年度への課題・改善方策

〇チーム大津として大高力を結集し、地域に根差し、地域に信頼される体・徳・知の調和のとれた生徒の育成に資するよう、今後も学校改善に努める。

〇主体的・対話的で深い学びの実践に向けた授業改善を推し進めながら教育活動の充実を図り、教職員一人ひとりが教材研究などの自己研鑽に積極的に取り組み授業力向上に努める。

〇熊本県学力向上研究指定校事業の研究指定を受けることで、探究活動を通したカリキュラムの研究を行い、高大連携の活動を進化させ進学指導体制の充実を図る。

〇携帯電話・スマートフォンのＳＮＳ等の利用を含めた情報モラルの醸成を図り、いじめ問題など生徒指導の課題に対して適切に対処できるよう学校の組織力を更に高める。

〇教職員全員が、チーム大津として本校のスローガン【盡己竢成】（「文武一体」基礎基本の力、「凡事徹底」やり抜く力、「恕の心」思いやりの心）を意識した教育を率先して行い、生徒一人ひとりと関わりながら、日々の授業、部活動、学校行事等を通してその意義を認識させ、将来の進路指導や生徒指導の充実に向けた教育活動を実践していく。